

片仮名本『蒙求和歌』第二種・三種本の研究

— 付 第三種本 翻刻と略異同 —

森 田 貴 之

〇、はじめに

『蒙求和歌』とは、源氏物語の本文校訂や注釈で知られる、鎌倉時代の学者・源光行の著作で、唐・李翰の著した故事成句集『蒙求』から標題を選び出し、主に『蒙求』古注に拠って^①、故事を和文化して掲出し、各故事につき、その故事内容から発想した和歌一首を付したものである。その和歌は、冒頭の春部から冬部（巻四）まではそれぞれに歌題を付して百首歌の体裁に配列し、恋部（巻五）以下は歌題は示さないものの、祝部、羈旅部などの部立で整然と配列されている。

この『蒙求和歌』の著者である源光行には他に、李嶠『百二十詠詩』をその注釈に拠って翻訳し和歌を付した『百詠和歌』や、白居易『新樂府』を翻訳して和歌を付したものと推定される『樂府和歌』（現在散佚^②）といった著作があり、『蒙求和歌』はそれら二作品とともに三部作の一部をなすものである。この『蒙求和歌』は、

菅原為長『仮名貞観政要』や藤原茂範『唐鏡』など同時代の漢籍和訳物の諸作品とともに広く読まれ、例えば延慶本『平家物語』に数首が引用されていることなどが指摘されている。⁴⁾

中世一流の学者である源光行が、『千字文』などと並んで四部の書の一つとして重んじられた幼字書『蒙求』をどのように解し、どのように和歌へと昇華させたのか。『蒙求和歌』は、中世学問の様相を知るに格好の材料である。しかし、『蒙求和歌』の諸本系統は複雑を極めており、研究に際して支障が大きい。

一、『蒙求和歌』諸本研究における第Ⅱ類本（片仮名本）第二種本

すでに先学によって、『蒙求和歌』主要諸本の整理が行われ、第Ⅰ類本（平仮名本）、第Ⅱ類本（片仮名本）、第Ⅲ類本（後人による混態本）に大別されている。⁵⁾ 第Ⅰ類本（平仮名本）と第Ⅱ類本（片仮名本）との間には、故事本文と和歌との両方にかんがりの異同が見られるのみならず、収録歌数にも違いがあり、ほとんど別の作品として扱うべき様相を呈している。

その第Ⅰ類本（平仮名本）・第Ⅱ類本（片仮名本）間の差異は、明確な証拠が示されているわけではないものの、著者源光行自身による改訂のあとと考えられ、⁶⁾ その先後問題に研究の関心が向けられてきた。しかし、未だその先後については決着を見ていない。一応現在のところは、第Ⅱ類本（片仮名本）を原撰本として原初の形態を多くとどめる可能性が高いと見なす意見が多い。⁷⁾

さらに『蒙求和歌』第Ⅱ類本（片仮名本）諸本も、第一種本（十四卷完本）、第二種本（七卷残欠本）、第三種本（七卷までの和歌のみの抜書本）に分類されている。

まず第一種本は、十四卷完本であるものの和歌に欠落が多く、第二種本と重なる巻七までを見ても計七箇所

に脱落がある。それに対し第二種本は、七巻までの残欠本ではあるが和歌の脱落が少なく、和歌を持たない段は「秋部・刈萱」と「冬部・氷」との二段に限られる。つまり、第Ⅱ類第二種本のみが持つ和歌が数首存在するわけである。しかし、現在まで独立した形で本文の紹介はなされてこなかった。

第Ⅱ類本（片仮名本）の本文は、国立国会図書館甲本の影印本（中文出版社『附音増広古注蒙求・蒙求和歌』、一九七三）が刊行されているほか、活字化されたものとして、角川書店『新編国歌大観』・続群書類従刊行会『続群書類従』および文成社『和訳蒙求』（千勝義重校注、一九二一年）、溪水社『蒙求和歌』校注』（章剣校注、二〇一二年）がある。しかし、いまだ『蒙求和歌』研究における基礎的資料の整備は十分ではない。

例えば、影印本に用いられた国立国会図書館甲本は、第Ⅱ類（片仮名本）第一種本に属し、伝慈鎮筆とされて『蒙求和歌』伝本中で最も書写が古いとされているものではあるが、先述の通り和歌の脱落が非常に多い。早くに活字出版された『和訳蒙求』は、国会甲本を底本としつつも、その欠落した和歌を一応補った形となっているが、それは国立国会図書館乙本を使用して校合を行ったことによるものである。というのも、国会乙本は、国会甲本の転写本群の一つで、その書写者である清水浜臣によって第Ⅱ類（片仮名本）第二種本（“宝永本”）とよばれる現存しない伝本⁸⁾を使用した校合がなされており、その校合結果を『和訳蒙求』が利用しているがために、国会甲本の和歌の欠落が一応補われた形となっているにすぎない。

同じく『新編国歌大観』も国会甲本を底本とし、一部欠落した和歌を補っているが、それも尊経閣文庫本によって校訂を行った結果である。この尊経閣文庫本も、国会甲本転写本群の一つであり、やはり“宝永本”を以て校合が行われており、⁹⁾『新編国歌大観』の校訂にも、その結果が一部引き継がれているのである。近年出版された『蒙求和歌』校注⁹⁾はその『新編国歌大観』をそのまま底本としている。

このように、『和訳蒙求』『新編国歌大観』は、校訂された活字本として非常に有益ではあるが、ともに現存

不明の“宝永本”を用いた校合が不明瞭な形で引き継がれており、当然だが、その本文は第一種本・第二種本を峻別できる形にはなっていない。そのためか、例えば『新編国歌大観』は第二種本によって和歌を補う形となっているのだが、同様に補完し得るはずの「恋部・孟光荊釵」では、なぜか和歌が脱落したままになっている、といった不備がある。

また、同じく早くに活字本として流布した『統群書類従』も、同じく国会甲本転写本群に属する小山田与叔手沢本を底本として同系統の数本によって校合し、第Ⅰ類本（平仮名本）から、その和歌のみを併せて掲載している。したがって見た目の上では、和歌の脱落を補う形となっているものの、それは第Ⅰ類本（平仮名本）に由来するものにすぎず、第Ⅱ類本（片仮名本）の和歌の脱落はそのまま残されている。

第Ⅰ類本（平仮名本）・第Ⅱ類本（片仮名本）の先後関係や改訂姿勢の検討は、『蒙求和歌』研究の重要課題である。そのためには細部への注目が欠かせない。そのことは池田利夫氏も

国会本（注 国立国会図書館甲本）が鎌倉期の古鈔本とは言え、既に原形をかなり損ねていることは指摘したところであり、新しい書写の内閣本（注 第Ⅰ類本（平仮名本）に属する内閣文庫甲本）では言うを俟たない。両種の成立の前後問題を徹底的に解明するためには、それぞれの原形をいささかでも修復した上でなければならぬが、現在の形態のままでも、全体にわたる比較と、細かな分析とが一層必要ではあらう。

と述べられ問題提起されていたところであり、^⑪現在通行する活字本および影印本のみによって支障をきたすことは明らかであろう。

こうした状況において、『蒙求和歌』第Ⅱ類第二種本は、残欠本のためか、これまでその本文や和歌が詳しく検討されたことはなかった。しかし、第Ⅱ類第一種本に見られる欠落を補完し得る重要な価値を持つほか、以下に述べるように、第Ⅱ類第一種本の「原形」を想定するための意義も大きい。その紹介を行うことは、『蒙求和歌』研究に資するところもあると考える。

そこで本稿では、まずはその和歌部分に着目し、第Ⅱ類第二種本の和歌の様相を概観し、併せて、第Ⅱ類第二種本から和歌を抜き出して成立したと考えられる第Ⅱ類第三種本との関係についても触れる。

二、第Ⅱ類本（片仮名本）第二種本概観

二―一、第二種本の和歌

まず、実例を示して、第Ⅱ類本系統の和歌の様相を確認しておきたい。冒頭の「春部・立春・漢祖竜顔」の和歌には、およそ次のような諸本間の異同が見られる。^⑬

【第Ⅰ類】

内閣甲本…あめのしたゆく末遠きはるの色はさはへのくさにあらはれにけり

【第Ⅱ類第一種】 国会甲本…和歌欠

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…メツラシキ春ノアサヒハムラサキノクモマライテシヒカリナリケリ

【第Ⅱ類第三種】

内閣乙本…メツラシキ春ノアサヒハムラサキノクモマライテシヒカリナリケリ

第Ⅱ類第一種本の伝本は、和歌を持たないか（国会甲本）、もともと和歌を持たなかったものに補入を施し

たことが明らかなもの（国会甲本の転写本群）のみである。それに対して、第二種本は、第一類本（平仮名本）とも異なる和歌を持っている。これが第二種本の大きな特徴であり、第二種本を紹介する意義の一つであることは先に触れた通りである。また、詳しくは後述するが、第三種本も第二種本同様の和歌を有する。

他に「春部・早蕨・汲黯開倉」「同・苗代・伯成辞耕」「夏部・水鶏・樊噲排闥」「恋部・孟光荆釵」も同じ様相を呈しており、いずれも第二類第一種本が歌を欠いている箇所、第二種本・第三種本は、第一類本（平仮名本）とも異なる和歌を持っている。

諸本によってわずかな差はあるものの、第二種本・第三種本が共通して和歌を欠くのは、「秋部・刈萱・息躬歴詆」および「冬部・氷・王霸氷合」の二首のみであり、第二種本は、『蒙求和歌』第二類本（片仮名本）のなかで最も和歌の整った系統であるといえる。

また、細部に目を向け、歌句単位での異同を見ても、第二種本・第三種本は、第一種本とは異なる歌句を持つ場合がある。一例として、「夏部・卯花・孟嘗還珠」を示しておく。

【第一類】

内閣甲本…しはしこそよをうの花のしそめともむかしにかへる玉川の里

【第二類第一種】

国会甲本…アレハテシカキノウツキモ花サキテ昔ニカヘルタマカハノサト

【第二類第二種】

筑波乙本…アレハテシカキネノウツキハナサキテムカシニカヘルタマカワノサト

【第二類第三種】

内閣乙本…アレハテシカキネノウツキハナサキテムカシニカヘルタマカハノサト

池田氏は、第二類本第二種本に属する筑波大学蔵乙本を紹介するなかでこうした歌に触れ、

これら一種本に見えない歌は、後人の補入という疑いもなくはないが、（中略）三類本（注 混態本）に見える歌とも一致するから、本来あったものと考えて良いであろう。

と述べられている。¹³ 第二種本・第三種本特有の和歌が、果たして原態の『蒙求和歌』にあったものなのか、あるいは後補や改変を経たものなのか、という問題は一考を要するが、第Ⅰ類本（平仮名本）・第Ⅱ類本（片仮名本）を混態させた第Ⅲ類本にも引き継がれている、という池田氏の指摘は注目される。

また、池田氏は特には触れられていないが、第Ⅰ類本（平仮名本）に属する静嘉堂文庫甲本は、第Ⅱ類本（片仮名本）との対校が示されており、その巻七までの対校に用いられた伝本（奥書によれば和学講談所本というが現在所在不明）は、第Ⅱ類本第二種本系統のものであったらしい。

以下に、先に見た二章段について、第Ⅲ類本の片仮名本由来の和歌、および静嘉堂文庫甲本対校本の和歌を示しておく（静嘉堂文庫甲本に関しては、校注から想定される本文で示した）。

春部・立春・漢祖竜顔

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…めつらしき春のあさはむらさきの雲間を出しひかり也けり

静嘉堂文庫甲本対校本文…メツラシキ春ノアサヒハムラサキノクモマライテシヒカリナリケリ

夏部・卯花・孟嘗還珠

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…あれはてしかきねのうへへき花さきてむかしにかへる玉川のと
静嘉堂文庫甲本対校本文…アレハテシカキネノウツキハナサキテむかしにかへる玉川のさと

一見してわかる通り、第Ⅱ類本（片仮名本）と第Ⅰ類本（平仮名本）とが混態されて新たな第Ⅲ類本（混態本）が生み出された際も、また、第Ⅰ類本（平仮名本）に属する静嘉堂文庫甲本に第Ⅱ類本（片仮名本）との対校が行われた際も、そのとき用いられたのは、第Ⅱ類本（片仮名本）諸本のうち、第二種本系統のものであったことがわかる。

第Ⅰ類本第一種本の現存伝本はすべて上述の国会甲本に由来し、この本が狩谷掖斎の手元に至るまで、第一種本に属する伝本の存在は知られていなかったと考えられる。一方、第二種本は比較的広く流布した本文であったらしい。例えば、『安斎隨筆』卷十三には、『蒙求和歌』について「巻は十四巻、歌は二百五十首なれども唯七巻あり」との記載があり、その著者・伊勢貞丈の見た『蒙求和歌』も、七巻までの第二種本であったことがわかる。^④このことから、池田氏は

江戸時代を通じて、この残欠本が流布していたばかりでなく、（中略）第一種の十四巻本すべてにかけている歌をこれらによって補うことができることから見て、残欠本としての由来も古く、鎌倉時代に既に見られたのではないかと思われる。

とも述べられているが、こうした第二種本の流布本としての性格は、上述の第Ⅲ類本・静嘉堂文庫甲本との関係によっても裏付けられ、『蒙求和歌』の流布を考える上でも、第二種本は重要な位置にあるといえる。

二二、卷八以降の第二種本

さて、第Ⅲ類本が、第Ⅱ類（片仮名本）第二種本と第Ⅰ類本（平仮名本）との混態によって作られた本文だっ

たとすると、現存の第Ⅱ類第二種本がすべて七巻残欠本であるのに対して、第Ⅲ類本は巻十四までの完本であることが新たな問題として浮上する。第Ⅲ類本は、第Ⅱ類第二種本の現存しない巻八以降において、どのような第Ⅱ類本（片仮名本）を用いて混態を行ったのだろうか。

実は、巻八以降にも、第Ⅱ類（片仮名本）第一種本が和歌を欠いている箇所、第Ⅲ類本が第Ⅰ類本（平仮名本）とも異なる和歌を持っている箇所がある。例えば、巻九「懷旧部・季札挂剣」がそれにあたる。

【第Ⅰ類】

内閣甲本…あはれにもきえにし跡の梢迄おもひをきける秋の霜かな

【第Ⅱ類第一種】 国会甲本…和歌欠

【第Ⅱ類第二種】 筑波乙本…欠巻

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…なきあとにかくるなさけのふかき哉あるよをとほ、なへてならまし

静嘉堂文庫甲本対校本文…なき跡にかくる情のふかき哉ある世をとほ、なへてならまし

こうした『第Ⅲ類本独自の和歌は、何に由来するのだろうか。巻八以降に用いられた第Ⅱ類本（片仮名本）には存在していた和歌だったのだろうか。だとすれば、第Ⅱ類第二種本のごとき片仮名本は、第Ⅲ類本成立段階では、後半の巻八以降も存在した完本だったことになる。¹⁵

第Ⅲ類本の和歌と片仮名本・平仮名本両本との距離については、すでに『新編国歌大観』を用いて簡単な調査を試みたことがあるが、¹⁶巻八～巻十四に関しても、第Ⅲ類本と片仮名本（第Ⅱ類第一種本）との間に異同を持つ例が一定量見られ、第Ⅲ類本に用いられた第Ⅱ類本（片仮名本）伝本が、巻七以前と巻八以降とで大きく変わっているようには見えない。第Ⅲ類本を作成した際の作成者の作為とも考え得るが、少なくとも巻八以降

も第Ⅱ類第一種本そのものに拠っていたわけではないことは間違いない。故事本文を含めた詳細な検討が必要だが、第Ⅲ類本は、失われた第Ⅱ類第二種本後半部の形態を推定する格好の材料となる可能性がある。そして、その第Ⅲ類本巻八以降の本文から想定される「仮想第二種本」には、第二種本が第一種本に対して果たす役割を期待できる可能性があるといえよう。

実は、右にも示した通り、静嘉堂文庫甲本に見られる対校も、巻八以降にも施されており、その対校結果も第Ⅲ類本と一致している。この事実も非常に興味深い。ただし、残念なことに、静嘉堂文庫甲本巻八以降の対校には第Ⅲ類本そのものが用いられているらしい。そのことは、巻七までは片仮名で注記がなされるのに対し、巻八以降は平仮名であり、明らかに対校本が変わっていることによっても明らかである。おそらく、静嘉堂文庫甲本の校合者である小林百枝は、前半部に用いた第Ⅱ類第二種本に準ずるものとして、混態によって欠落箇所が非常に少ない形態となっている第Ⅲ類本を善本として対校本に採用し、巻八以降の対校を行ったのであろう。したがって、静嘉堂文庫甲本は、第二種本の失われた巻八以降を推定する材料としては使えない。結局のところ、第Ⅲ類本のみがその可能性を有することになる。

二―三、第二種本の果たす役割

第Ⅲ類本については、別稿で詳細な検討を試みるとして、本稿では、巻七までの残欠本である第二種本が第一種本に対して果たす役割について述べておきたい。それは、第二種本の和歌が、第一種本の欠落した和歌を補い得るだけではなく、第一種本に収録されている和歌そのものを見直す上で重要な意味を持つことである。

例えば、以下はいずれも、和歌全体として第Ⅰ類本（平仮名本）と第Ⅱ類本（片仮名本）との間で比較的大きな違いのある和歌の例である。そして同時に、第Ⅱ類本第一種本と第二種本との間にも小さいながら異同が

あり、その異同のある歌句が第二種本と第Ⅰ類本（平仮名本）とで一致する、という例である。

春部・子日・丁固生松

【第Ⅰ類】 内閣甲本…と、せあまりやとせのはるの夢さめて子日にあへる松のあけほの

【第Ⅱ類第一種】 国会甲本…ト、セヨリヤトセフリニシユメチヨリ子ノヒノ春ニアフノ松原ラ

【第Ⅱ類第二種】 筑波乙本…ト、セアマリヤトセフリニシユメチヨリ子日ノ春ニアフノマツハラ

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…と、せあまりやとせの春の夢さめて子日にあへる松のあけほの

静嘉堂文庫甲本対校本文…ト、セアマリヤトセフリニシユメチヨリ子日ノ春ニアフノマツハラ

秋部・立秋・張翰適意

【第Ⅰ類】 内閣甲本…さらてたになにはの波にさそはれて袖にかさねてあきのはつかせ

【第Ⅱ類第一種】 国会甲本…フルサトノナニハノナミニヲモヒタツヨリシモソテニアキノウハカセ

【第Ⅱ類第二種】 筑波乙本…フルサトノナニハノナミニヲモヒタツヨリシモソテニアキノハツカセ

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…ふるさとのなにはの浪におもひたつおりしも袖に秋のはつかせ

静嘉堂文庫甲本対校本文…フルサトノナニハノナミニオモヒタツヨリシモソテニアキノハツカセ

森田貴之

左記の例について、第Ⅰ類本（平仮名本）と第Ⅱ類（片仮名本）第一種本との二本のみを比較して考えた場合、傍線部の「と、せあまり」と「ト、セヨリ」、「あきのはつかせ」と「アキノウハカセ」についても改訂がなされた、という想定が得られる。

しかし、第Ⅱ類（片仮名本）のうち第二種本を検討材料に加えると、一概にそうは結論づけられない。第二種本と第Ⅰ類本（平仮名本）との間では、傍線部についてはいずれも異同がない。したがって、本来第一種本の形態であって、第Ⅰ類本（平仮名本）の影響から後に改訂がなされて第二種本の形態が生まれたか、あるいは、本来第二種本の形態であって、それが誤写などにより第一種本の形態になったか、そのどちらかということになる。もし後者であるとすれば、左記傍線部に関しては、第Ⅱ類本（片仮名本）・第Ⅰ類本（平仮名本）間での改訂はなされず、傍線部以外の部分でのみ改訂がなされたということになる。

このような問題は、第Ⅰ類本（平仮名本）と第Ⅱ類本（片仮名本）との間で、和歌全体としては特に大きな差がない場合にも当てはまる。次は「夏部・菖蒲・時苗留懐」の例である。

【第Ⅰ類】 内閣甲本…このさとにねさす沢辺のあやめくさ都にいか、ひきうつすへき

【第Ⅱ類第一種】 国会甲本…コノサトニネサスカハヘノアヤメクサミヤコニイカ、ヒキウツスヘキ

【第Ⅱ類第二種】 筑波乙本…コノサトニネサスサハヘノアヤメクサミヤコニイカ、ヒキウツスヘキ

【第Ⅱ類第三種】 内閣乙本…コノサトニネサスサハヘノアヤメクサミヤコニイカ、ヒキウツスヘキ

【第Ⅲ類】 実践女大山岸本…第Ⅱ類本に関する記載なし

静嘉堂文庫甲本対校本文…第Ⅱ類本との校合なし

微細な違いだが、歌語としては「あやめくさ」との結びつきから「沢辺」がふさわしい。第一種本のみに第Ⅱ類本（片仮名本）を代表させて考えた場合、片仮名本「カハヘ（河辺）」から平仮名本「沢辺」へと改訂が行われた、などと考えられそうな例だが、第二種本等を検討に加えると、すべて「沢辺」であり、第Ⅰ類本（平

仮名本」と全く同一の和歌となっている。また、第Ⅲ類本や静嘉堂文庫甲本にも校異に関する記載は見られない。もし、第一種本の「河辺」という表記が誤りで、第Ⅱ類本（片仮名本）の形態は本来「サハへ（沢辺）」であったとすれば、この段の和歌は、第Ⅱ類本（片仮名本）・第Ⅰ類本（平仮名本）間での改訂が行われなかった例に含むべきものということになる。

次に、もう少し和歌の内容に関わる異同として、「春部・藤花・霊運曲笠」を見てみたい。

【第Ⅰ類】

内閣甲本…みかさ山松のよこへにいまそしる色こき藤のしたのこゝろを

【第Ⅱ類第一種】

国会甲本…ミカサヤマ松ノヨコエヲトカメキテヤトルカフチノ花ニヲラルナ

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…ミカサ山マツノヨコエヲトカメキテヤトカルフチノハナニヲラルナ

【第Ⅱ類第三種】

内閣乙本…ミカサ山マツノヨコエヲトカメキテヤトカルフチノハナニヲラレナ

【第Ⅲ類】

実践女大山岸本…第Ⅱ類本に関する記載なし

静嘉堂文庫甲本対校本文…みかさ山松のよこへヲトカメキテヤトカルフチノハナニヲラルナ

この「霊運曲笠」の故事内容は、謝霊運が好んで曲柄の笠を用いていたところ、孔隠士が素直でありたいというのに曲がったものを使うことをなじったのに対して、謝霊運は自分の影を恐れた『莊子』逸話を引いて、自分の影を恐れる必要はない旨を返答して気に留めなかったというものである。

『蒙求和歌』は、この故事をふまえて、曲柄の笠を持つ謝霊運を、三笠山の横枝の松にかかる藤の花に準えて和歌を詠んでいると考えられる。第三句以降が異なる第Ⅰ類本（平仮名本）も同様である。しかし、第Ⅱ類第一種本の和歌の形では、「宿るか、藤の」と疑問形で問いかけ、さらに「藤の花に折らるな」と語りかけて

いると読め、故事にひきつけても意味をとることが困難な歌であるように思う。

それに対し、第Ⅱ類第二種本は、「宿借る藤の」と連体修飾によって上の句が藤の花にかかり、その藤に折られるなよ、と語る単純な接続になっていると解せる。故事題詠としても「曲柄の笠をとがめて謝霊運に言い負かされるな」といった意味を含むものと見ることができ、故事との重ねあわせもうまくいく。こちらのほうがより適切な形態ではないかとも考えられる。

こうした問題は瑣末に過ぎるものかも知れない。しかし、『蒙求和歌』研究の中心的課題は、第Ⅱ類本（片仮名本）と第Ⅰ類本（平仮名本）両本の差異からその先後や改訂過程を検討することにある。その際に、第Ⅱ類本（片仮名本）本文として、第一種本のみに拠っていたのでは、単なる誤写と意図的改訂とを弁別することができない、という問題をはらんでしまうことになる。そもそも現存する第一種本はすべて、国会甲本の直接の転写によるものに限られ、その本文を校訂し得るに足る伝本に乏しい。そのため第Ⅱ類第一種本（国会甲本）に書写上の不審点があっても、文脈上の推定によって校訂する以外には方法がなかった。

田坂順子氏は、『蒙求和歌』第Ⅱ類本（片仮名本）と第Ⅰ類本（平仮名本）両本の差異を五段階に分類し、上述のような「一語乃至一句程度の小さな異同の場合」について、

転写段階での誤写等の原因を推測させる単純なものも多いが、中には意味が変わってしまう類の異同も存する。それらは話の内容と照らし合わせることで本来の姿に辿りつくことが可能と考えられる。

と述べられているが、こうした従来からの方法に加え、第Ⅱ類本第二種本を参照することにより、その推定の確度を高めることができるだろう。

三、第Ⅱ類第三種本概観 付 翻刻と校異

三―一、第三種本の伝本

これまで述べてきたように、『蒙求和歌』第Ⅱ類第二種本は独自の和歌を持ち、歌句の異同にも注目すべきものがあるなど、第一種本の欠落や誤謬を補う価値が高く、第Ⅰ類本（平仮名本）と第Ⅱ類本（片仮名本）との関係を検討する上でも重要な位置を占めている。第二種本の話本文部分についても精査することが必要なのはもちろんだが、第Ⅱ類本（片仮名本）の原型を推定するためにも第二種本の存在は、決して軽視することはできない。

さらに、第Ⅱ類本第二種本は、第Ⅲ類本に用いられているほか、他本（上述の静嘉堂甲本・国会乙本・尊経閣文庫本など）との校合にもしばしば利用されており、第一種本の出現まで長く流布本的存在でもあったことは疑いなく、第二種本に関する情報の整理を経ずには、第Ⅱ類本および『蒙求和歌』全体の享受等について理解することはできないだろう。しかし、これまで第二種本の本文が紹介されたことはなく、第一種本に不明瞭な形で第二種本が校訂に用いられた活字本がそのまま利用されてきたのが現状である。

本稿は、主に、第二種本の和歌部分に注目したものであり、その故事本文全体を含めた紹介は他稿に譲るが、第Ⅱ類第二種本整理の端緒として、第二種本から和歌部分のみを摘記したと考えられる第Ⅱ類第三種本について触れ、あわせてその本文を紹介しておきたい。この第Ⅱ類第三種本についても、これまでその本文が紹介されたことはなかった。

第Ⅱ類第三種本とは、故事本文を持たず、蒙求標題と和歌のみ（四季部においては歌題も示されている）を抜き書きした特異な伝本である。¹⁹和歌が片仮名で掲出されていることから第Ⅱ類本（片仮名本）に属し、七巻

(羈旅部)までの和歌のみを載せる状況から、七卷残欠本である第Ⅱ類第二種本系統との密接な関係が想定される。実際、本稿第一章に「春部・立春・漢祖竜顔」「夏部・卯花・孟嘗還珠」の例で示した通り、和歌の有無や歌句の異同も第Ⅱ類第二種本と一致する。

また、「春部・帰雁・王榮覆基」を見ると、「囲碁有帰雁勢」(内閣文庫乙本)、「囲碁有帰雁勢云故」(中田氏蔵本・無窮乙本)とそれぞれかなり似た補注を持っている。⁽²⁰⁾この補注は碁を主題とする故事を「帰雁」題詠に用いたことの背景を指摘するものだが、この補注もまた第三種本の元になった第Ⅱ類第二種本に由来する。第二種本に属する諸本は共通して、和歌を掲出したあとに「圍碁二有帰雁ノ勢云故」(筑波乙本)といった注記を持っており、第三種本はそれを引き継いでいるのである。

このように、和歌のみではあるが、第二種本に準ずる存在として扱うことが可能な第三種本は、内閣文庫蔵乙本・無窮会神習文庫蔵乙本の存在が従来から報告されていたが、⁽²¹⁾その既知の二本にもう一つ、中田光子氏蔵本を加えることができる。以下、これら三本について略述しながら、その元となった第二種本の系統についても触れていきたい。

三一二、内閣文庫蔵乙本・中田光子氏蔵本

『蒙求和歌』第Ⅱ類第三種本のうち、内閣乙本と中田氏蔵本とは深い関連が指摘でき、その祖本の系統もある程度想定することが可能である。例えば次のように、「秋部・菊・桓景登高」と「恋部・孟光荊釵」とには、両本に共通する文字の欠落が見られ、両本には、何らかの共通する祖本があったことが想定できる。内閣乙本は、蒙求標題・歌題・和歌をすべて一行に記すのに対し、中田氏蔵本は、蒙求標題・歌題と和歌とを二行に分けているなど、その体裁には差異があるが、両本はかなり近い環境から出たものと見ることができ。この点、

もう一本の無窮会乙本とその出自を大きく異にする。

秋部・菊・桓景登高

【第Ⅱ類第三種】内閣乙本…ケフハシモフモトノハナニエヒ□^本シタカネノキクヲカサ、サリセハ

【第Ⅱ類第三種】中田蔵本…ケフハシモフモトノハナニエヒ□^本シ高根ノ菊ヲカサ、サリセハ

恋部・孟光荊釵

【第Ⅱ類第三種】内閣乙本…アキカセモアハレトヤヲモフクカタヘトニモカクニモヲトロフ

【第Ⅱ類第三種】中田蔵本…秋風モアハレトヤ思フ吹カタヘトニモカクニモ□^{本マ}ヲトロフ

こうした内閣乙本と中田氏蔵本の近似は、両本の旧蔵者からも裏付けることができる。内閣乙本は、その蔵印から、昌平坂学問所旧蔵本で、林家所蔵本であったことがわかる。特に「江雲渭樹」の蔵印があることから林羅山旧蔵本ということまでが判明する。一方、中田氏蔵本は蔵印から滋野井公澄の旧蔵本であったことがわかるが、それ以上に重要なのは、序に続く、春部第一・二首目下部に以下のような書写事情を記したと思われる書き込みが見られることである（一）括弧内に訓読を試みた。

此書聞名既久一日過吉田氏素庵嵯峨別墅／打談之次遍搜本朝旧記和歌小説考往古視／近時慨嘆有餘不覺信宿臨別主人出此卷／示之予読之詠歌漏洩一首万涕噫此何心／哉恨無完本拔題与歌書之彼以李翰唐言／譯大和假名者不遑筆記後來俟完本其畢其／功而已 正意誌

（此書、名を聞くこと既に久し。一日、吉田氏素庵嵯峨別墅を過ぐるに、打ち談ずる次で、本朝旧記和歌小説を遍搜し、往古を考み、近時を視るに、慨歎餘有り。覚へず信宿し、別れに臨んで、主人、此巻を出だし之を示す、予、之を読むに詠歌漏洩一首万涕、噫あ此れ何の心や。恨むらくは完本無し。題と歌とを抜き、之を書す。彼の李翰唐言を以て大和假名に譯せしは、筆記するに違あらず、後來、完本を俟ちて其功を畢へんのみ。正意誌す。）

この「正意」とは、林羅山・松永尺五・那波活所とともに惺門四天王と称された儒者で、堀景山の曾祖父にあたる堀杏庵（一五八五—一六四三年）であろう。この記述を信じるなら、中田氏蔵本の祖本は、堀杏庵自身が素庵から示された本を筆写したものらしい。藤原惺窩の同門として、堀杏庵は、角倉素庵ともたしかに交流があった。そして、当然、林羅山とも近い関係にあった。⁽²³⁾ 羅山旧蔵本である内閣乙本と堀杏庵書写本に由来する中田氏蔵本が共通祖本を持っていたとしても全くおかしくはない。

そして、とりわけ興味深いのは、中田氏蔵本に名前に見える角倉素庵は、『蒙求和歌』諸本のうち、第二類第二種本のいくつかの奥書にも、その名前を見ることができ人物であることである。そのうちの一本、東京大学図書館本には、以下の奥書がある（【】内は、同種の早稲田大学本にて補い、（）内に訓読を試みた）。

此両策以素庵艸本令写之惜矣不全遂旋可書加耳脱落舛午不可勝計予病暇之餘已蒙求考附焉【傍】以朱称私云是了見也

壬申季春十五日

古藤子誌

（此両策、素庵艸本を以て此を写さしむ。惜しいかな全からず。遂に旋らば書き加ふべきのみ。脱落舛

午勝あけて計かぞふべからず。予、病假の余に蒙求もつを以て考附す。傍に朱を以て私云と称するは、是れ了見なり。壬申（注 一六三二）季春（注 三月）十五日、古藤子誌）

同様の奥書は、披雲閣文庫蔵本や早稲田大学蔵本にも見られ、他に焼失した浅野図書館蔵本にもあったという。「古藤子」ないし「左藤子」（浅野図書館蔵本）が誰なのかは不明だが、この奥書を信じる限り、これらの本の祖本は、角倉素庵の手沢本で、それが寛永九年（一六三二）に転写されたらしい。堀杏庵が「吉田氏素庵嵯峨別墅」で実見したものもおそらくは、その「素庵草本」であろうから、中田氏蔵本は「素庵草本」原本から堀杏庵によって抜き出されたものに由来することになる。素庵は寛永九年六月に亡くなっており、堀杏庵による素庵訪問は、それ以前のこととなり、寛永年間に素庵本なる本がたしかに存在していたことは確実である。堀杏庵書写本に由来する中田氏蔵本、羅山旧蔵本である内閣乙本とともに素庵本系統の第二種本からの抜き書き本と考えてよいだろう。

実際、先掲の「恋部・孟光荊釵」は、素庵本系統の早稲田大学本・東大図書館本について見ると、東大本には欠落はないが、早稲田本には「本脱」との記載があり、もともと何らかの脱落があったことが注されている。それが第三種本のような字句の欠落だったとすれば、素庵本系統の第二種本と第三種本との関係を示すものということになる。

【第Ⅱ類第二種】早稲田本…アキカセモアハレトヤヲモフ、クカタヘトニモカクニモヲトロヲ 本脱

東大図本…秋風モアハレトヤ思フ吹カタヘトニモカクニモイヒクヲトロヲ

また「夏部・郭公・漂母進食」からも、素庵本系統の第二種本と第三種本との関連を確認することができる。左記の通り、他本に「音（こへ・こゑ）」とあるところが、素庵本系統の第二種本および第三種本ではともに、特異な「コト」となっているのである（内閣乙本は不審と思ったか、脱字としている）。

【第Ⅱ類第一種】国会甲本…アハレトソヲモヒシリヌルホト、キスカタライヲキシ古ヘノ音ヘ

【第Ⅱ類第二種】筑波乙本…アハレトソヲモヒシリヌルホト、キスカタラヒヲキシニシヘノコエ

無窮甲本…あはれともおもひしるぬるほとゝきすかたらいおきしいにしへのこゑ

（素庵本系）東大図本…アハレトソ思シリヌルホト、キスカタヒヲキシニシヘノコト

（素庵本系）早稲田本…アハレトソヲモヒシリヌルホト、キスカタラヒヲキシニシヘノコト

【第二類第三種】内閣乙本…アハレトソヲモヒシリヌルホト、キスカタラヒヲキシニシヘノコト

中田蔵本…アハレトソオモヒシリヌルホト、キスカタラヒヲキシニシヘノコト

現存する素庵本転写本群のうち、東京大学図書館本・披雲閣文庫蔵本は「李広成蹊」「原憲桑柘」を欠くなど、完全な形ではない。早稲田大学本が素庵本系統諸本で唯一、「李広成蹊」「原憲桑柘」にも和歌を持ち、先掲の「恋部・孟光荆釵」の「本脱」などの記載を見てもより善本と考えられるが、内閣乙本と中田氏蔵本の二本の第三種本も、第Ⅱ類第二種素庵本系統諸本を整理する際の比較資料として大きな価値を有するといえう。⁽²⁵⁾

三―三、無窮会図書館神習文庫蔵乙本

次に、無窮会神習文庫蔵乙本は、他の二本の第三種本とやや様相を異にしており、『蒙求』標題・歌題を掲出したあと、漢文で『蒙求』本文が摘記されてから和歌が付されるという特殊な形態であり、序も持たない。『蒙求』本文が摘記されたのは書写段階での改変によるものであろうから、『蒙求和歌』のうち和歌のみを持つ形態上、第Ⅱ類第三種本に一応分類できる。その和歌は平仮名に改められており、それに由来する誤写も多い。また和歌を欠く箇所も多くなり不完全な形態である。ただし、他の『蒙求和歌』諸本に比してかなり特殊な歌句を持つ場合があり、そのいくつかが第Ⅱ類第二種本の一本である無窮会神習文庫蔵甲本と一致することは興味深い。

秋部・月・真長望月

【第一種】国会甲本…イカニセムトモナキ月ニソテヌレテオモハヌサトニアリアケノソラ

【第二種】筑波乙本…イカニセントモナキ月ニソテヌレテヲモハヌサトニアリアケノソラ

早稲田本…イカニセントモナキツユニソテヌレテヲモハヌサトニアリアケノソラ

無窮甲本…いかにせんともなき月に袖ぬれておもはぬ里にありあけのつき

【第三種】内閣乙本…イカニセントモナキツキニソテヌレテヲモハヌサトニアリアケノソラ

中田蔵本…イカニセン友ナキ月ニ袖ヌレテオモハヌ里ニ有明ノソラ

無窮乙本…いかにせん友なき月に袖ぬれて思はぬ里に有明の月

恋部・雍伯種玉

【第一種】国会甲本…テニクミシシツクノスヘノシルヘカナツヒニアウセノキテノタマミツ

【第二種】筑波乙本…テニクミシ、ツクノスエノシルヘカナツキニアフセノキテノタマミツ

早稲田本…テニクミシ、ツクノスエノシルヘカナツキニアフセノキテノタマミツ

無窮甲本…手にくみてしつくの末のしるへかななつにあふせのそてのしたひも

【第三種】内閣乙本…テニクミシシツクノスエノシルヘカナツイニアフセノキテノタマミツ

中田蔵本…手ニクミシ雪ノスエノシルヘカナ終ニ逢瀬ノ井手ノ玉水

無窮乙本…手に汲し雪のすゑのしるへ哉夏にあふせの井手の玉水

羈旅部・管仲随馬

【第一種】国会甲本…マヨハマシ雪ニイヘチヲユクコマノシルヘヨシレル人ナカリセハ

【第二種】筑波乙本…マヨハマシユキニイエチヲユクコマノシルヘヨシレルヒトナカリセハ

早稲田本…マヨハマシユキニイエチヲユクコマノシルヘヨシレルヒトナカリセハ

無窮甲本…まよはまし雪にいわほを行こまのしるへをしれる人なかりせは

【第三種】内閣乙本…マヨハマシユキニイエチヲユクコマノシルヘヨシレルヒトナカリセハ

中田蔵本…マヨハマシ雪ニ家路ヲ行駒ノシルヘヨシレル人ナカリセハ

無窮乙本…まよはまし雪にいわほを行駒のしるへをしれる人なかりせは

他の第二種本・第三種本諸本とは異なる歌句が、無窮会甲本と同乙本のみに共通して見られる例が多いことがわかる。おそらくは単純な誤写に起因する異同と思われるが、その誤写に一致が見られるということは両本

が共通祖本を持つからだろう。無窮会甲本はその蔵印から国会乙本の書写を行った清水浜臣の旧蔵本であることはわかっているが、奥書等はなく詳しい来歴は不明である。ただし、この本は、第Ⅱ類（片仮名本）系統の諸本でありながら平仮名によって書写されており、その点でも平仮名で和歌を掲出する無窮会乙本と一致している。

無窮会神習文庫の両本の細部には一致しない部分も見られるため直接の書承関係までは認定できないが、この両本は第二種本諸本の中で、失われた『宝永本』・筑波乙本（後述）・素庵本系統（早稲田本・東大図本など）とも異なる独立した系統の伝本群として位置づけられるべきだろう。第Ⅰ類本（平仮名本）や第Ⅲ類本と比べても、第Ⅱ類第二種本諸本には多様な広がりが見られ、あらためて第二種本が江戸時代を通して流布本的位置にあったことがわかる。

三―四、第二種本の善本

第Ⅱ類第二種本のうち、最も和歌の欠落の少ないものは、実は、素庵本系統ともやや異なる筑波大学蔵乙本で、この筑波乙本が和歌を欠いているのは「冬部・氷・王霸氷合」一首のみである。第Ⅱ類（片仮名本）第一種本・第二種本・第三種本がすべて和歌を欠く「秋部・刈萱・息躬歴詆」についても、筑波乙本（およびそれを受ける彰考館蔵本上巻）には、和歌が存在しているのである。第二種本について、池田氏が「第一種本に欠けている歌の内、上巻では「王霸氷合」を除いて歌が見えることがある」と述べられたのも、この筑波乙本の形態に基づいてのことである。²⁶⁾

こうした点を重視すると、上述の素庵本系統ではなく筑波乙本こそが第二種本諸本中の最善本と見なせ、素庵本系統に属する第三種本（内閣乙本・中田氏蔵本）も、その価値を幾分失うことになる。しかし、筑波乙本

は、明らかに第Ⅰ類本（平仮名本）平仮名本からの影響をうけている箇所がある。そして実は、その例こそが、筑波乙本が第Ⅱ類本系統のなかで唯一和歌を持つとされる「秋部・刈萱・息躬歴詠」なのである。第Ⅱ類本（片仮名本）系統のなかで、筑波乙本（およびそれを承ける彰考館蔵本上巻）のみに和歌が存在するというその和歌は、実は一見してわかる通り、第Ⅰ類本（平仮名本）由来のものにすぎない。

【第Ⅰ類】

内閣甲本…タかせのふきもみたらはいか、せんまかきあれたる庭のかるかや

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…タ風ノフキモミタラハイカ、セムマカキアレタル庭ノカルカヤ

これは欠落していた和歌を、筑波乙本が独自に第Ⅰ類本（平仮名本）から補ったものと考えるべきだろう。筑波乙本は、頭注や傍記の形で平仮名本との対校を行っており、時として、それが本文に不明瞭な形で組み込まれてしまっていることがあるのである。それは歌句の異同においても見られる。

春部・春駒・齐景駟千

【第Ⅰ類】

内閣甲本…はる草の野かひのこまもなき跡の法のしるへとならばこそあらめ

【第Ⅱ類第一種】

国会甲本…春草ノ、カヒノコマモノチノヨノチノシルヘトナラハコソアラメ

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…ハルクサノ、カヒノコマモナキアトノ法ノシルヘトナラハコソアラメ

無窮甲本…春くさのかひのこまものちの世のみちかきしるへとならばこそあらめ

東大図本…春草ノ、カヒノ駒モ後ノ世ニチカキシルヘトナラハコソアラメ

【第Ⅱ類第三種】

内閣乙本…ハルクサノ、カヒノコマモノチノヨノミチノシルヘトナラハコソアラメ

夏部・蟬・卞和泣玉

【第Ⅰ類】

内閣甲本…日にみかくみねの梢になく蟬のこゑこそたまのひかり也けれ

【第Ⅱ類第一種】

国会甲本…ヒニミカクミネノコスエニナクセミノコエコソタマノヒ、キナリケレ

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…ヒニミカクミネノコスエニナクセミノコエコソタマノヒカリナリケレ

無窮甲本…ひにみかくみねのこすへになくせみのこゑこそ玉のひ、きなりけれ

東大図本…ヒニミカクミネノ梢ニナク蟬ノコエコソ玉ノヒ、キナリケレ

【第Ⅱ類第三種】

内閣乙本…ヒニミカクミネノコスエニナクセミノコエコソタマノヒ、キナリケレ

夏部・蚊遣火・田單縦牛

【第Ⅰ類】

内閣甲本…なにはめかあしをくふるかやり火の煙をうしと思ひきえける

【第Ⅱ類第一種】

国会甲本…ナニハカタアシヨリクフルカヤリヒノケフリヲ牛ト思ケルカナ

【第Ⅱ類第二種】

筑波乙本…ナニハメカアシヨリクフルカヤリヒノケフリヲウシトオモヒケルカナ

無窮甲本…なにはかたあしをりくふるかやり火のけふりをうしとおもひける哉

東大図本…ナニハカタアシヨリクフルカヤリヒノケフリヲウシト思ケルカナ

【第Ⅱ類第三種】

内閣乙本…ナニハカタアシヨリクフルカヤリヒノケフリヲウシトオモヒケルカナ

第Ⅱ類本のなかで、筑波乙本だけが第Ⅰ類本（平仮名本）と一致を見る例が多く、その混淆の程度も大きいことがわかる。筑波乙本は、第Ⅱ類本のうちで最も和歌の欠落の少ない伝本ではあるが、この筑波乙本をもつて第二種本の標準的本文と見なすことはできない。

つまり、清水浜臣や岡本保孝が校合に用いたという“宝永本”が所在不明で、一見最も整った形態である筑波乙本には第Ⅰ類本（平仮名本）との交雑が見られ、無窮会蔵本には誤写が多い以上、現存する第二種本の標準的な本文としては、素庵本系統のものがまずは重要であるといえよう。そして本稿で述べた通り第Ⅱ類第三種本のうち、内閣文庫乙本・中田氏蔵本は、その素庵本系統からの直接の抜書本であることが判明し、東大図書館本等が和歌を欠く「李広成蹊」「原憲桑枢」にも和歌を有する。和歌部分のみの抜き書きではあるが、第二種本系統の和歌について、極めて良好な情報を提供してくれる重要な伝本と位置づけられるのである。

以上、第二種本所収和歌の『蒙求和歌』研究への有用性を指摘してきた。第二種本のお話本文部分の調査は別の機会を期すが、以下に、第Ⅱ類第二種本所収和歌整理の端緒として、第Ⅱ類第三種本の翻刻を行い、第三種本伝本間での主要な異同を示しておく。

付、翻刻と異同…第Ⅱ類本第三種本『蒙求和歌』

【凡例】

- ・底本は内閣文庫蔵『蒙求和歌』（請求記号：和25851-201-570、通称：内閣文庫乙本）である。印記「林氏蔵書」「浅草文庫」「江雲渭樹」「日本政府図書」「昌平坂学問所」。真名序・仮名序あり。目録なし。
- ・底本は四周双辺・有界・每半葉十行に書写されている。その改丁位置を（1才）などと示した。
- ・底本は蒙求標題・歌題（四季部のみ）を一行書きで掲げ、その下に和歌を二行書きに記しているが、一行書きに改めた。
- ・片仮名は通行のものに改めたが、踊り字（ゝ、ゝ）はそのまま残した。明らかな誤写と思われる箇所もその

ままに翻刻した。なお、古体の片仮名により判別の難しいものが数例あるが(「キ」「マ」「テ」など、その場合は文意によって仮名を選択した。

- ・真名序および仮名序にのみ、適宜句読点を加えた。訓点は省略した。
- ・傍記はそのまま傍記し、見せ消し箇所は、元の字にへゝを付し、改められた字を傍記する形で示した。
- ・底本は蒙求標題として四字のみを掲出するため、他本が八字(二つの故事)を標題として採用している場合、() を付して補った。

- ・底本に頭注や下注がある場合には、【 】 を付して示した。
- ・意図的な空白箇所には □ を挿入した。

- ・和歌を欠く場合、(空白) として示した。

- ・第Ⅱ類本第三種本に属する以下の伝本との略異同を示した。

中田藏本…中田光子氏藏。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムによった(ナ3-3-3)。原本未見。

印記「滋野井文庫」「中田氏藏書印」「公澄」。真名序・仮名序あり。目録なし。

無窮乙本…無窮会神習文庫藏。目録番号…一〇八九五、『蒙求和歌集』。印記「無窮会神習文庫」「井

上頼圀藏」「井上氏」。版心部分に「休二亭」とあり。序なし・目録あり。

《略異同凡例》

- ・真名序、仮名序については、対校本に底本と異なる字句がある場合、底本の該当箇所に傍線を付し、あらためて底本の字句を掲げ、対校本の該当箇所の字句を示した。
- ・和歌については、対校本に底本と異なる字句がある場合、底本の該当箇所に傍線を付し、対校本から該当する箇所のみを摘記して示す形をとった。

- ・標題、歌題および無窮乙本のみが持つ目録・故事部分については異同の対象外とした。
- ・漢字と仮名などの表記の違いや送り仮名の違い、漢字の違い、有意ではない仮名遣いの差異、訓点等の有無に関しては異同に示さなかった。
- ・対校本に補入がある場合、補入後の字句に異同がないときは略異同に挙げなかった。

【翻刻】

蒙求和歌并序

夫蒙求者李翰之所撰也。述數百家之事迹以教人。和歌者柿本之遺流也。聯卅一字之篇什以傳世。如予者、素稟愚魯之性、雖疎和漢之才、少日受訓説、壯年求簡要。是以、試和皇漢之曩行、聊写我朝之風俗、假男女於此文之中、訪言行於他書之外、寄其詞於花月、歌詠二百五十、分其題於春秋、卷成一十四偏、為幼童之易覽、不顧耆老之所嘲而已。于時元久甲子之歲、初秋壬申之日、朝議大夫源（一才）光行、閑居之假慨然記之云尔

【異同】

「遺流」	——	「遺訓」	（中田藏本）
「卅一字」	——	「卅一〈宗〉」	（中田藏本）
「如予者」	——	「然者」	（中田藏本）
「和漢之才」	——	「和歌之才」	（中田藏本）
「聊写」	——	「聊呈」	（中田藏本）
「假慨然」	——	「假慨然」	（中田藏本）

蒙求ハ李翰カ意根ヨリオコリテ、フルキアトヲアツメテ人々ニツタヘ、和歌ハ柿本ノ言葉ヨリサカヘテ、アラタナルコトワサ、コ、ニヤマトモロコシノミチヲタトリ、コトハハナト月トノイロニマトヘルモノアリ、イト

ケナクテコノ書ヲツタヘヨムトイヘトモ、竹ノエタニムチヲウチテ、サカヒヲカヘリミルコトヲワスレ、サカリノトキソノ心ヲサトラムトスレハ、又ヤナキノハヲアムニモノウクシテ、ヨクヲキハムルニヨハス、ナカコロハ北闕ノ北ニ家ヲワスレテ、霜ヲフミ星ヲイタ、クニイトマナク、イマハ東邑ノ東ニスタレヲトチテ、雪ヲカ、ケ、ホタルヲトモスニタヨリアリ。トキニ男^{ヲトコオナ}女^{メキ}ノ名ヲ一卷ノウチニヌキイテ、(1ウ)カシコクロカナルタメシヲ、アマタノフミノソコヨリウカ、ヨイテタリ、歌二百五十ヲツラネテ、卷^{マキ}一十有四ヲナセリ。チ、ノシルストコロクラシトイヘトモ、コノサトルトコロアキラカナラムタメナラシ。トシハハシメヒサシキ、トキハキノエノアキ、ノトケキミツノエノナミニ、ムラサキノサヲケ^テフテヲソメテ、シロキアサノカミニシルストナリ。(5行空白)(2オ)(1丁空白)(2ウ)

【異同】「モノアリ」——「モノナリ」(中田蔵本)

「又ヤナキノハヲ」——「人ヤナキノハヲ」(中田蔵本)

「イトマナク」——「マナク」(中田蔵本)

「男女ノ名ヲ一卷ノウチニヌキイテ、」——「男女ノ一卷ノウチニヌキイテ」(中田蔵本)

「ウカ、ヨイテタリ」——「ウカ、ヒイテタリ」(中田蔵本)

「クラシトイヘトモ」——「イラムトイヘトモ」(中田蔵本)

「アキラカナラム」——「アキラム」(中田蔵本)

「サヲケ^テ」——「サヲケテ」

蒙求和歌第一 春部廿首

漢祖竜顔 立春 メツラシキ春ノアサヒハムラサキノクモマワイテシヒカリナリケリ

丁固生松 子日 ト、セアマリヤトセフリニシユメチヨリネノヒノ春ニアフノマツハラ

孔光温樹 霞 ミヤマキノナヲサヘアタニモラサシトヲモヒコメケルヤヘカスミカナ

【異同】 中田蔵本…「オモヒコメ^{へタ}ル」、無窮乙本…「八重霞かも」

干木富義 鶯 ウクヒスノアルシナリケルタニノトヲミステ、タニ、スキムモノカハ

【異同】 中田蔵本…「タ、ニ」、無窮乙本…「^たあ、^に」

安國々器 梅 コ、ロアレヤナタカキサトノムメカ、ヲハナナキヤトニサソフ春風

張敞画眉 柳 コ、ロヲソタレモソメケルサヲヒメノ柳ノマユノアケホノ、イロ

史丹青蒲 花 イツカタニハルノアルシヲタツヌラムハルノミヤマノミチヲワステ

【異同】 無窮乙本…「花の主を」「春のしかまの」

汲黯開倉 早蕨 テラシクルハルノメクミノナカリセハカケノワラヒモノウカラマシ

【異同】 中田蔵本…「チラシクル」、無窮乙本…「ちらしくる」

戴封積薪 春雨 アメサソフシタノソラハシタモエノケフリヨリコソクモリソメケレ【此歌不審】(3才)

【異同】 中田蔵本…「シタヒノソラハ」・注なし、無窮乙本…「したひのそては」「したもゆの」・注なし

齊景駟千 春駒 ハルクサノ、カイノコマモノチノヨノミチノシルヘトナラハコソアラメ

【異同】 中田蔵本…「ノチノヨノニチカキ」、無窮乙本…「後の世のみちかき」

王粲覆棊 婦雁 カヘルカリヘタツルクモノナコリマテオナシアトヲソヲモヒツラネシ【困基有婦雁勢】

【異同】 中田蔵本…「^困基有婦雁勢云故」、無窮乙本…「思ひつらねん」・【^困基有婦雁勢云故】

龔勝不屈 喚子鳥 ナニトカクオモハヌヤマニヨフコトリキシカタニノミヤフルコ、ロヲ

【異同】 無窮乙本…「何と^かな^く」

伯成辞耕 苗代 コ、ロヲソナハシロミツニマカセツルヨニスムミチヲヲモヒカヘシテ

李廣成蹊 桃 モノイハヌハナモ人メヲサリケリミチモサリアヘヌモ、ノシタカケ

【異同】 中田蔵本…「サソケリ」、無窮乙本…「さりにけり道とさりあへぬ」

麤竺取資 雉

イカハカリコヲオモフキ、スマヨハマシヤクヘキノヘヨケフトシラスハ

壺公謫天 葦葉

タヒ、トノヤトカルノヘノツホスミレオモハヌハルノヒカスヲソツム

濟叔不癡 躑躅

フミカヨフヤマチヲタニモイハツ、シイハネハコソアレフカキニヨイヲ

靈運曲笠 藤花

ミカサ山マツノヨコエヲトカメキテヤトカルフチノハナニヲラレナ

【異同】

中田藏本…「マツノコスエヲナカメキテ」「花ニオアルナ」、無窮乙本…「とめかねて」「はなにをらるな」

劉寵一錢 款冬

イエツトニヒトフサヨリシヤマフキノハルニイロアルキテノタヒ、ト (37)

薊訓歴家 暮春

ヤトコトニヲナシナコリヲシタウカナ春ノワカレノユフクレノソラ

蒙求和哥第二 夏部十五首

辛毗引裾 更衣

タカタメモウクナカリケリナツコロモヨヲソクキミモナサケノミカハ

【異同】

中田藏本…「ヨラハクキミモ」、無窮乙本…(空白)

孟嘗還珠 卯花

アレハテシカキネノウツキハナサキテムカシニカヘルタマカハノサト

漆室憂葵 葵

イカニシテノトケキミヨニアフヒクサソノカミヤマヲモヒシルニモ

樊噲排闥 水雞

カキクレシコ、ロノヤミモアケニケリマキノイタトヲタ、ククヒナニ

漂母進食 郭公

アハレトソヲモヒシリヌルホト、キスカタラヒヨキシイニシヘノ

【異同】

中田藏本…「イニシヘノコト」、無窮乙本…「あはれとも」「いにしへのこと」(本段夏部末尾にあり)

時苗留犢 菖蒲

コノサトニネサスサハヘノアヤメクサミヤコニイカ、ヒキウツスヘキ

常林帶經 早苗

シツミテモフミシルミチヲウレシトカアマトノサナヘオモヒトリケム

【異同】

中田藏本…「フミシル道ヲウレシトヤ山田ノサナヘ」

無窮乙本…「へつゝみても文みる道をうれしとや山田さなへ」

高鳳漂麦 晩立 イフタチノニハノチキリモワスレミツフカキナカレヲクムトセシマニ（4才）

【異同】 無窮乙本…（空白）

陸續懷橘 盧橘 タチハナノマタウラコワキコスエニモミニシムカセノイロハアリケリ

【異同】 中田藏本…「マタウラワカキ」、無窮乙本…「またうらわかき」

車胤聚螢 螢 ヒトマキヲアケモハテヌニアケリニケリホタルヲトモスナツノヨノソラ

卞和泣玉 蟬 ヒニミカクミネノコスエニナクセミノコエコソタマノヒ、ギナリケレ

【異同】 中田藏本…「此事異尤多」、無窮乙本…「ひゝき也けり」

田單縱牛 蚊遣火 ナニハカタアシヨリクフルカヤリヒノケフリヨウシトヲモヒケルカナ

黃香扇枕 扇 アフクヘキヒトナキミコソカナシケレヲナシマクラニナツハキヌレト

西施捧心 夕顔 ユフカホノタソカレトキノソラメニモタクヒニスヘキチノナキカナ

【異同】 中田藏本…「花ノナキカナ」、無窮乙本…「花のなき哉」

魏顆結草 夏草 ナツクサノナヒクスエハヨミツルカナシケミラムスフユメノマクラニ

蒙求和歌第三 秋部廿首

張翰適意 立秋 フルサトノナニハノナミニヲモヒタツヨリシモソテニアキノハツカセ

郝隆晒書 七夕 タナハタニミヲソカスヘキコ、ロヨリホカニハフミノアラハコソアラメ（4ウ）

季倫錦障 萩 ムサシノハハキノニシキヲオラヌマソワカムラサキニシカシトハミシ

【異同】 無窮乙本…「しかしとはみん」

袁盎却座 女郎花 ヲミナヘシタマノマカキハコ、ロセヨサテソムカシモツユニシヲレシ

【異同】 中田藏本…「タマノアカキハ」、無窮乙本…（空白）

廉頗負荊

荻 トモスレハソヨキシクレノヲトカヘテノキニヨレフスヲキノシタカセ

楊脩捷對

薄 ミルカラニシルクヤハアラヌイトス、キホトヘテタレカヲモヒトキケル

【異同】

中田藏本…「シルカラニ」、無窮乙本…「しるしやはあらぬ」

息躬歴詆

刈萱 (空白)

【異同】

中田藏本…「歌脱」、無窮乙本…(空白)

廉范五袴

蘭 ヒニソヘテアキノアハレハヲホヘ山イクノトモナキフチハカマカナ

蘇武持節

鴈 ヘタテコシミヤコノアキニアハマシヤコシチノカリノシルヘナラスハ

【異同】

中田藏本…「アハマシカ」、無窮乙本…「あはましか」

五鹿岳々

鹿 クモキヨリノハラノクサヲフクカセニヨレフスシカノコエキコユナリ

【異同】

中田藏本…「野原ノ草ノ」「鹿ノ聲キコユナリ」、無窮乙本…「野原の草の」「鹿ぞ声のきこゆる」

楊宝黃雀

露 ワカ、トノワサタノス、メタツアトノイナハニヨケルツユノシラタマ

公超霧市

霧 ヘタツルモハレユクイロトミルモノヲ人ノコ、ロノアキ、リノソラ (5才)

【異同】

無窮乙本…「晴ゆく色も」「あき (以下欠)」

顔駟寒剝

槿 ツイニカクハルサヘアキニアヒニケリヨ、ニシホレシヨハノアサカホ

【異同】

無窮乙本…「よ、にしほれて」

鄭莊置驛

駒迎 イタ、ヒカコマヒクアキムカヘコシアフサカヤマノセキノタヒ、ト

【異同】

中田藏本…「イクタヒヤ」「逢坂山へニ」、無窮乙本…「幾たひか」

真長望月

月 イカニセントモナキツキノソテヌレテヲモハヌサトニアリアケノソラ

【異同】

無窮乙本…「有明の月」

伯瑜泣杖

擣衣 アキノヨノヲヒノネサメニウツコロモヨハルヒ、キハイカ、カナシキ

【異同】 無窮乙本…「いかに悲しき」

軻親断機 虫 コレヤコノ、ヘノニシキモアサシトテハタヲルムシノムラミケルコエ

桓景登高 菊 ケフハシモフモトノハナニエヒ□シタカネノキクヲカサ、サリセハ

【異同】 中田藏本…「エヒ□^本シ」、無窮乙本…（空白）

離朱明目 紅葉 ナカメヤルチサトノヤマノモミチハ、ノキノコスエトイハヌハカリソ

秦彭攀轅 暮秋 カキリアリテカヘルナラヒハフリヌレトナヲコノアキハシタハシキアキ

【異同】 中田藏本…「猶此秋シタハシキカナ」、無窮乙本…「したはしきかな」

蒙求和哥第四 冬部十五首

盛吉垂泣 初冬 トモシヒノカケサユルヨノアクルマテ人ノヤミトフ冬ハキニケリ（5ウ）

【異同】 中田藏本…「ヒトノカミトフ」、無窮乙本…（空白）

震畏四知 落葉 チラサシトイハセノモリノモミチハモアラシハソラハシラスシモアラシ

【異同】 中田藏本…「紅葉、^モハ〱嵐ハ空ニ」、無窮乙本…「嵐は空に」

原憲桑樞 時雨 アト、ツルイハノトサシノイフクレヲシクレナラテハトフヒトソナキ

閔損衣单 霜 コロモテノモリノコスエハハツシモニウラカレユクヲアハレトソミル

【異同】 無窮乙本…（空白）

鍾離委珠 霞 クモヰヨリアラレニニタルタマノイロヲヒトリヤニハニヲモヒスツヘキ

孫康映雪 雪 ヨモスカラストアレヲノミツカ、ケ、ルフミミルニハノユキノトモシヒ

【異同】 中田藏本…「カ、ケツル」、無窮乙本…「文みる窓の雪のひかりに」

趙勝謝壁 寒芦 ナニハエノアシノシタヲレトニカクニヨシナキアマノクチスサミカナ

蒼頡制字 千鳥 ハマチトリムカシノアトヲタツネキテフテノウミヲハクムヘカリケル

【異同】 中田蔵本…「尋ネテソ」、無窮乙本「たつねてそ」

王霸氷合 氷（空白）

【異同】 中田蔵本…「歌脱」、無窮乙本…（空白）

羅含吞鳥 水鳥 ミツトリノウキネノユメノナコリヨリナミノコロモモフカクナリニキ

【異同】 中田蔵本…「ノコリヨリ波ノ心モ」、無窮乙本…「のこりよなみの心もふくなりぬる」

羊續懸魚 網代 イトハル、ミヲウチカハノアシロキニネタクソヒヲノオモヒヨリケル（6才）

【異同】 無窮乙本…「ねたくそひらの」

鄧都蒼鷹 鷹狩 ハシタカノカケウツルランイリヒサスカタノ、クサニトリサハクナリ

【異同】 無窮乙本…（空白）

陰方祀竈 炭竈 イマソシルヨニスミカマノシルシトテユクスエトヲクタヘヌケフリヲ

阮孚蠟履（祖約好財）埋火 キエカヘリヲモフモカナシウツミヒノイケルアシタノホトモナキヨヲ

【異同】 中田蔵本…「ヲモノモカナル」「^イチケルアマタノ」

虞延尅期 歲暮 トシクレシクモノトサシヲフキトケハミネノアラシノナサケナリケリ

蒙求和哥第五 恋部廿首

紀瞻出妓 ヲモヒアマリイロニイツルモトカナラハアハテモコヒニミヲソカヘマシ

【異同】 無窮乙本…「よひに身をかへてまし」

宿瘤採桑 ツユフカキクワトルソテノナコリヲソカヘルソラナクヲモヒヲキケル

【異同】 中田蔵本…「桑トルソラン」

詰汾興魏 ナテシコノユクスヘトホキイロミレハワカレシハナノカタミナリケリ

【異同】 無窮乙本…「いろしれは」

楚莊絶綫
タレトシモワカヌナコリノトモシヒノコ、ロニキエヌナサケナリケル

【異同】 中田蔵本…「燈ソ心ニフカキ」、無窮乙本…「燈へに^の」「情也けり」

無塩如漆
イロナクテサカリススキヌトミシホトニナタカクナリヌアキノミヤマキ
(6ウ)

文君當鑑
イタマモルツキヲモフタリナカムレハアレタルヤトモサモアラハアレ

雍伯種玉
テニクミシシツクノスエノシルヘカナツイニアフセノヰテノタマミツ

【異同】 無窮乙本…「夏にあふせの」

盧充幽昏
アサカラヌチキリハサテモアリスカハヲナシヨニタニスマヌミナレト

【異同】 中田蔵本…「アへス^りカ、ハ」「スマヌミナレハ」、無窮乙本…「飛鳥川」

衛后髮鬢
ナヲサリニヲモヒソメテシクロカミノコ、ロナカクヤムスホ、レケル

【異同】 無窮乙本…「黒髪を」「結は、ける」

飛燕體輕
フルサトノネクライテケルホトモナククモヰハルカニトフツハメカナ

【異同】 中田蔵本…「ネクラ出へ^タル」

班女辞簾
サキタチシミチノタメシヲヒクカラニノチノクルマモノリヨクレニキ

【異同】 中田蔵本…「ノリライレニキ」、無窮乙本…「先たつも」

太真玉墓
ワレトイハヌコ、ロノクサハミエシカトタマノカ、ミノカケハカヨヒキ

【異同】 中田蔵本…「タサノカ、ミノ」、無窮乙本…(空白)

董永自賣
ハ、キノアトヲトハレヌミナリセハヒトリフセヤニシツミハテマシ

【異同】 中田蔵本…「ハ、キ、ノ」、無窮乙本…「は、き、の」

買妻恥醜
マテトイヒシハルニモアハテアレニケルノチノコ、ロハハツカシノモリ【朱買臣也】

【異同】 中田蔵本…注なし、無窮乙本…「春にもあはし」・注なし

庵俟鑿井
ヘタテコシムカシノカケヲナラヘシハ、ホリカネノ井ノアルシナリケリ (7オ)

【異同】 無窮乙本…「ならへこし」

陳平多輦
アタナラヌクルマノアトニシカシトヤタシロノカトニコ、ロヨセケル

【異同】 中田蔵本…「タシロノヤトニ」、無窮乙本…「むしろの宿に」

孟光荊釵
アキカセモアハレトヤヲモフフクカタヘトニモカクニモヲトロフ

【異同】 中田蔵本…「トニモカクニモ□□^{本マ}ヲトロヲ」、無窮乙本…(空白)

韓寿竊香
ナキナソトイフヘキモノヲワカソテニカクレヌモノハヨハノウツリカ

齊后破壊
タマカツラハフキモカヒソナカリケルハラフアラシノコ、ロツヨサニ

宋女愈謹
アリハテヌナカトソイマハナリナマシウキヲモシタフコ、ロナラスハ

【異同】 無窮乙本…「空白」

蒙求和哥第六 祝部十首

王戎簡要(裴楷清通) ヲモヒキヤヨソニキ、コシハナノナノワカミノウヘニナランモノトハ

【異同】 中田蔵本…「ハルノナノ」「ナラヌ^{ムモ}ノトハ」、無窮乙本…「ならずものとは」

落下歴数
アマノカハソラニカソヘシツキナミモチヨヲカネタルミツクキノアト

【異同】 中田蔵本…「チヨヲヤカネタル」

于公高門
カケナヒククルマヲミレハワカ、トヲコ、ロヒロクソヲモヒタテケル

【異同】 中田蔵本…「ナケカヒク」^本「オモヒタテタル」

曹参趁装
サリトモトヲモヒシスエソトヲリヌルミヲシルモノハコ、ロナリケリ (7ウ)

【異同】 中田蔵本…「サトトモ^ッヲ」

陸凱貴盛
春申珠履
ヒトエタモモル、イロナキハルヤマノハナノサカエハタクヒアリヤハ
タ、ヒトノコ、ロノウチモヲトロキ、タマヲフミケルクツノヒ、キニ

【異同】 中田蔵本…「タ、ヒトリ」、無窮乙本…「おとろぎし」

王濬懸刀
カセフケハカタナヒキナルタケノヨヲワケテソミツルユメノアケホノ【國掌分竹行故也】

【異同】 中田蔵本…「カタナヒキケル」「ハチテソミツル」・注なし、無窮乙本…（空白）

相如題柱
ウレシクモミチアルミヨニアフミカヤセタノナカハシフミモタカヘス

【異同】 中田蔵本…「フミモ^ッサ」カヘス、無窮乙本…「あふみちや」

張氏銅鈎
カソフレハナ、ヨマテヲソネサメケルハトフクアキノユクスエノアキ

【異同】 中田蔵本…「行末ノアト」、無窮乙本…「七世までこそ」（下句欠）

黃霸政殊
ヤマフカミナヲノミヨソニキクトリモ人ノコ、ロヲメテ、キニケリ【鳳凰集事也】

【異同】 中田蔵本…「メテキ、ニケリ」・注なし、無窮乙本…（空白）

蒙求和哥第七 羈旅部十首

袁宏泊渚
イカニセムヲナシウキネニアリアケノ月ノトモフネコキワカレナハ

博望尋河
アマノカハウキ、ニカヘルミチナクハナヲコソキカメクモノミナカミ

【異同】 中田蔵本…「ウキ、ニアヘル」「ナヲコソキカヌ」、無窮乙本…（空白）

郭文遊山
ヲクラヤマノハナトモミチニアクカレテミヤコノウチハスムナハカリソ（8才）

【異同】 無窮乙本…「おく山の」

子猷尋戴
ナニカマタアハテカヘルトヲモフヘキツキトユキトハトモナラヌカハ

【異同】 中田蔵本…「友ナラヌヤハ」、無窮乙本…「何あまた」・「友ならすやは」

管仲隨馬
マヨハマシユキニイエチヲユクコマノシルヘヲシレルヒトナカリセハ

【異同】 無窮乙本…「雪にいわほを」

李陵初詩

ヲナシエニムレキルカモノアハレニモカヘルナミヲトヒヲクレヌル

廣徳從橋

ナミアラキハマナノウミヲアヤフミシコ、ロノハシノアサカラヌカナ

呂望非熊

カキクラシシラヌキナニアヒミシモコ、ロノウラノカ、ミナリケリ

【異同】 中田蔵本…注なし、無窮乙本…「あいみしと」・注なし

郝廉留錢

タヒ、トノコマニミツカフチキリマテヒノクマカハノアサカラヌカナ

長房縮地

イクサトヲコメケルタケノツエナレハヒトヨニカヘルイツチナルラム (3行空白) (8ウ)

【異同】 中田蔵本…「家路ナルラム」、無窮乙本…「家路なるらん」

(翻刻は以上である)

注

(1) 『蒙求和歌』と『蒙求』古注(書陵部本および真福寺本が現存。ともに汲古書院『蒙求古註集成』所収)との関係については、早川光三郎「古蒙求探求ノート」『滋賀大学文学部紀要人文科学・社会科学・教育科学』八(一九五八年十二月)に指摘がある。また敦煌文書の『蒙求』断簡との関わりも指摘されている(章剣「『蒙求和歌』と敦煌文書——敦煌研究院藏九五号本『李翰自注蒙求』を中心に——」『中国学研究論集』二〇(二〇〇八年四月)。

(2) 『蒙求和歌』跋文に「抄出兩三之書帙、所謂撰『蒙求之中』、叙十四卷、抽百詠之句、連二十二卷、述樂府之章、分五箇卷、各々和其詞、軸々綴其詠、是也。」(国会甲本、訓点のみ私に付した)とあり三部作であったことがわかる。『蒙求和歌』は散佚しているが、『新勅撰和歌集』収録の「樂府を題にて歌よみ侍りけるに、陵園妾の心をよめる 源光行 閉ぢはつるみ山のおくの松の戸をうらやましくもいづる月かな」といったものだったか。

(3) 小川剛生『武士はなぜ和歌を詠むのか』(角川選書・二〇〇八年)は「これらに共通する性格として、政道の古典を対象とし、簡古な仮名文で記されていること、原書の内容に忠実であり一種の国字解といえること、さらに直接の読者は武家政権関係者であり、教訓を兼ね政道の資とすることなどが挙げられる。一連の作品にふさわしい名称はないけれど、仮に「政道仮名抄」と称したい。このような書物は、中世を通じてかなりの数にのぼっている」と述べている。

(4) 早くに野村八良「説話文学其の二(翻訳文学)」「増補鎌倉時代文学新論」(明治書院・一九三二年)による指摘がある。延慶本『平家物語』第一末「漢王ノ使ニ蘇武ヲ胡国ヘ被遣事」に「秋部・雁・蘇武持節」「羈旅部・李陵初詩」「春部・帰雁・王祭覆基」の和歌が用いられ、第二本「左少弁行隆事」に「秋部・槿・顔駟蹇剥」の和歌が用いられている。

(5) 池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠 補訂版』(笠間書院・一九八八年)。池田氏の表記は、川瀬一馬「唐物語と蒙求和歌」『日本書誌学之研究』(講談社・一九四三年)による分類表記を引き継ぎ、第一類本、第二類本……と表記する。しかし、第二類本の内部分類の呼称である第一種本、第二種本との混同を避けるため、本稿ではあえて、第Ⅰ類本、第Ⅱ類本……とローマ数字によって表記する。

(6) 川瀬一馬「唐物語と蒙求和歌」前掲注(5) 著書は「異つた系統の本文が並び行はれてゐる主要なる原因は、著者たる源光行が自ら改稿を行つたが為であると認められる」とし、また田坂順子『蒙求和歌』の基礎的考察——四季の部を中心に——『福岡大学日本語日本文学』一六(二〇〇六年)も「これは後人の改作などではなく、一人の作者の模索の結果とみてよいのではないか」と述べている。

(7) 野村八良氏は第Ⅰ類(平仮名本)を初稿本と、第Ⅱ類(片仮名本)を再治本とし、川瀬一馬氏も第Ⅰ類(平仮名本)を初稿本、第Ⅱ類(片仮名本)を精撰本と位置づけられていたが、池田利夫氏は逆に、第Ⅱ類(片仮名本)が先行し、第Ⅰ類(平仮名本)に改稿された、と論じられた(池田利夫「蒙求和歌伝本系統再考」前掲注(5) 著書)。近年発表された、章剣『蒙求和歌』の片仮名本と平仮名本『中国学研究論集』二六(二〇一一年四月)も「片仮名本を平仮名本に改稿したと考えるほうが自然であらう。」と池田説を支持する。

- (8) 宝永年間の識語を持つという所在不明の伝本。尊経閣蔵本の書写者である岡本保孝も本書による校訂を行っているほか、広島大学蔵本に宝永本に類する奥書があるという報告もなされており(黒木香「資料紹介」広島大学蔵本『蒙求和歌』について)『古代中世国文学』六(一九九五年三月)、それらによる本文の解明が期待される。
- (9) 池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書の紹介による。上巻識語に「天保二年秋九月廿一日以掖斎先生所蔵宝永年中本比較」、上巻冒頭の凡例に「天保三年春／おなじとし秋宝永年間の写本にて一校す此時も青にてしるす」とあり、「宝永本」によって校合がなされたことがわかるという(原本未見)。
- (10) 同じく第一種本の国会図書館本、書陵部本で対校を行っている。
- (11) 池田利夫「蒙求和歌伝本系統再考」前掲注(5) 著書所収。なお、括弧内は森田による注である。
- (12) 以下に引用した各伝本は、紙焼き写真(静嘉堂甲本・山岸本・中田氏蔵本・筑波乙本)ないしデジタル写真(国会甲本・内閣甲本・内閣乙本・東大図本・早稲田本・無窮会甲本・無窮会乙本)によった。なお、引用に際しては異本注記等は省いた。
- (13) 池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書
- (14) 『安斎随筆』巻十三「蒙求和歌」項目「四季恋祝羈旅を詠ぜり、巻は十四卷、歌は二百五十首なれども唯七卷あり」(故実叢書による)とある。このことについて小山田与清が彰考館本上巻に「与清按に伊勢安斎が見し本も七巻の残欠本と見ゆ」と記しているという(池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書、原本未見)。
- (15) 池田利夫氏は第Ⅲ類本の用いた両類の底本について「山岸本(注 第Ⅲ類本)の編者が見た一・二類の二部の本は、現存本に比較してそれぞれ余程良い伝本であったと言わねばならなくなる」とも述べられている(池田利夫「蒙求和歌の成立と伝流」前掲注(5) 書所収)。
- (16) 『京都大学國文學論叢』二七・二九・三一に掲載した『蒙求和歌』第三類本 本文へ1・へ2・へ3(二〇二二年三月・二〇二三年三月・二〇一四年三月) 参照。
- (17) 国会図書館蔵乙本にみられる宝永本を用いたという校合は巻七までしか行われていない。
- (18) 田坂順子前掲注(6) 論文

- (19) 第三種本諸本のうち、無窮会乙本のみ漢文によって故事が示されている。
- (20) 第三種本諸本のうち、無窮会乙本には見られない。
- (21) 東大図書館本・早稲田本・筑波乙本・無窮会甲本を確認した。
- (22) 川瀬一馬「唐物語と蒙求和歌」前掲注(5) 著書および池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書。池田氏は無窮会本については未見という。無窮会神智文庫にはもう一つ、第Ⅱ類第二種本の『蒙求和歌』が存在し、区別のために仮に、第二種本のもの(目録番号…一〇四七〇)を甲本と称し、第三種本のもの(目録番号…一〇八九五)を乙本と称する。
- (23) 林屋辰三郎『朝日評伝選 角倉素庵』(朝日新聞社・一九七八年)、堀勇雄『人物叢書 林羅山』(吉川弘文館・一九六四年)、鈴木健一『人物評伝選 林羅山』(ミネルヴァ書房・二〇一二年)等、参照。
- (24) 「古藤子」なる人名は彰考館蔵『詞林采葉抄』の奥書にも「寛永辛未閏十月三日之夜、灯火以古本一校了、岩倉羽林^具之秘本也、少々有差違乎 古藤子書」(濱口博章「曲阿『詞林采葉抄』覚書」『中世和歌の研究 資料と考証』(新典社・一九九〇年)の指摘による)と見える。
- (25) 内閣乙本には、他に、恋部・買妻恥醜に「朱買臣也」および祝部・王濬懸刀に「國掌分竹行故也」、といった中田氏蔵本にはない欄外注がある。このうち、祝部・王濬懸刀に関する「國掌分竹行故也」は、第Ⅱ類第二種本には見られないものの、第Ⅱ類第一種本の国会甲本およびその転写本群に見ることができものである。内閣乙本は、その一部において、第一種本からの影響を想定する必要もあろうか。
- (26) 池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書
- (27) 上巻のみ第二種本に属する彰考館蔵本は筑波乙本の転写本であるし、慶応大学斯道文庫蔵本はさらに書写に乱れが多いという(原本未見。池田利夫「蒙求和歌の伝本系統と諸本」前掲注(5) 著書による)。

【附記】

貴重な資料の閲覧の機会を賜りました関係諸機関に御礼申し上げます。また、多くの助言を賜りました国文学研究資

料館・小山順子氏、大阪大学・葛清行氏ほか蒙求和歌輪読会の諸氏に感謝申し上げます。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金『『蒙求和歌』に見る漢文学と和文学の融合』（課題番号25370245）による研究成果の一部である。また、2014年度南山大学パッへ研究奨励金（I-A2）による研究成果である。

片仮名本『蒙求和歌』第二種・三種本の研究

——付 第三種本 翻刻と略異同——

森田 貴之

要 旨

本稿では『蒙求和歌』片仮名本のうち第二種本諸本の和歌について検討を加えた。『蒙求和歌』の研究は、片仮名本・平仮名本という二種の『蒙求和歌』の先後をめぐる問題に関心が向けられてきたが、片仮名本内部での諸本研究は十分ではなく、無批判に第一種本（国会図書館甲本）が用いられてきた。しかし、第二種本は、第一種本の不備を補う価値があり、単に第一種本に脱落した和歌を補い得るのみならず、第一種本の不審な歌句を第二種本によって訂正すべきと考えられる例も多く、『蒙求和歌』研究に際して視野に入れられるべき重要性を持っている。また、その抜き書き本である第三種本は、江戸期の第二種本の多様な広がりを示し、第二種本和歌の状況を概観することができるものとして資料的価値も高い。よって、その翻刻を付し、諸本間での異同を示した。